

自分の思いを生き生きと表現できる力を育てる生活単元学習

～活動体験を生かした表現の工夫を通して～

高田町教育研究所
高田町立高田中学校
教諭 武藤 郁子

1 主題設定の理由

特別支援教育における一人ひとりの教育的ニーズとは、障害を一つの個性と捉え、自立し社会参加できる力をつける考え方である。そのためには、人間関係を築き、コミュニケーションの方法を身につけることが必要不可欠である。人の話を聞き、理解して受け入れることや、自分の思いを表現することは、そのための第一歩であると考えられる。

2 主題の意味

(1) 自分の思いを表現できる力とは

自分の思いを表現できる力とは、自分の身の回りの出来事や経験から、考えたことや感じたことを相手に伝える力であり、表現の方法として次の3つの方法が挙げられる。

- ア 言語表現(言葉や文字など)
- イ 非言語表現(写真やコンピュータなど)
- ウ 複合的表現(紙芝居や劇など)

(2) 思いを生き生きと表現できる力とは

自分の思いを生き生きと表現できる力とは、自分が考えたことや感じたことを筋道立てて論理的に伝えることを通してお互いに思いの共有を図り、伝え合う喜びや楽しさを感じ取りながら表現できる力である。一方的な表現や、独り善がりな理解では伝え合いは成立しないため、表現者は理解者の立場を思いやり理解しやすいように表現し、また、理解者は表現者の考えや立場を尊重して受け入れることが求められる。

3 副主題の意味

(1) 活動体験とは

活動体験とは、生徒が目標や見通しをもって、「話す・聞く・見る・書く・作る」などの体験や経験を行い、自分の考えや思いを持つことである。

(2) 活動体験を生かした表現の工夫とは

生活単元学習の中で実際に行った活動体験

の中で、見たこと、聞いたこと、考えたことや感じたことを言葉や文字、または機器を活用した映像を通して、相手に分かりやすく伝える工夫であり、表現したい内容の構成、声の大きさや速さ、間の取り方、聞き手を意識した話し方を身に付けることである。

4 研究の目標

生活単元学習において、自分の思いを生き生きと表現できる力の育成を図るために、活動体験を生かした表現の工夫について支援のあり方を究明する。

5 研究の仮説

生活単元学習過程において次のような活動体験と表現の工夫をしていけば、自分の思いを生き生きと表現できる力が育つであろう。

(1) 活動体験

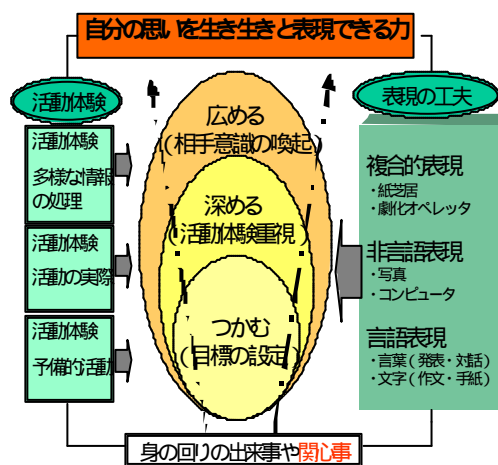
- ア 実際の活動に向けた予備的活動
- イ 活動体験アを生かした実際の活動
- ウ 活動体験イで得た情報の処理

(2) 表現の工夫

- ア 言葉や文字などの言語表現
- イ 写真やコンピュータなどの非言語表現
- ウ 紙芝居などの複合的表現

6 研究の構想

研究構図



7 研究の実際

(1) 単元名「高中先輩、ホークスの
中村選手を紹介しよう！」

(2) 単元の目標

ア インタビュー活動を通して、人とコミュニケーションをとる場合の基本的な知識やマナーを身につけることができる。

イ インタビューした活動体験を、機器を活用しながら相手にわかりやすく言葉や文章で伝えることができる。

ウ 自ら周囲の物や人にかかわることで、生活をより楽しく豊かにできることに気付き、人間関係を広めていこうという意欲を持つことができる。

エ 先輩の話聞くことにより、将来への夢を持ち、進路実現へ向けて努力しようとする意欲をもつことができる。

つかむ段階(1~7/22)

予備的活動 「中村選手に手紙を書こう」

中村選手は高田中出身のソフトバンクホークス選手である。野球へ大変関心を持つ生徒Aにとって中村選手は小学校からの憧れだった。そこでまず、インタビュー前の挨拶状を書いた。学習プリントを使い、手紙の基本形式を学習した後、自分の思いを文章にまとめた。

予備的活動 「電話で住所をたずねよう」

手紙を出すため、ホークスの事務所に電話で住所を尋ねた。電話のかけ方を学習し、原稿を書いて、言葉遣いなどに注意しながら何度も練習してから本番に臨んだ。メモを取りながら話すのはとても難しい様子で、何度も聞き直ししながら、無事に住所を尋ねることができた。

予備的活動 「プレゼントを作ろう」

インタビューの際にプレゼントするコーヒーカップ(写真1)を制作した。中村選手の名前とホークスのマークを使って自分で積極的にデザインして、色を塗って焼き付けた。喜んでくれるだろうという期待を持ちながら、終始笑顔で楽しそうに制作することができた。

予備的活動 「インタビュー内容の流れを考えよう」

インタビューの内容については、入団する前の高中時代のことなどを5つ、入団してからの喜びややりがいなど5つの質問にしばった。また、実際のインタビューの流れについては、次のように話し合った。



あいさつ
自己紹介
プレゼント渡し
インタビュー
サインのお願い
お礼のあいさつ

【写真1 コーヒーカップ】

<考察>

実際の活動に向けた以上のような予備的活動をおこなうことにより、文字で相手に自分の思いを伝える喜びや、間接的な会話である電話を通して人とのコミュニケーションがとれた喜びを感じ取ることができた。また、プレゼントの制作やインタビュー内容と流れを確認することにより、本番のインタビューに向けて自信を持って臨めるよう準備をしっかりと整えることができた。

深める段階(8~19/22)

活動の実際 「中村選手にインタビューしよう」

期待と不安を胸に、7月8日雁の巣球場へ行った。球場までの行程においても公共機関の利用の仕方、金銭処理などの活動体験を重視した。球場ではまず練習風景を見学した後中村選手に会い、プレゼントを渡すことができた。その際、中村選手からの質問に、生徒Aは身振りをまじえながらアドリブで説明することができた。インタビューについても、予定していた内容を落ち着いて尋ねることができ、中村選手もわかりやすい言葉で丁寧に答えてくださったため、無事にインタビューを終えることができた。

活動の実際 「インタビューのまとめ」

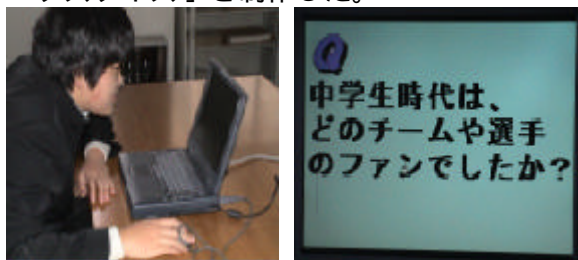
インタビュー体験を作文に書くとともに、インタビュー内容を文章にまとめ、発表原稿を作成した。言葉を文字で再現しながら、あらためて中村選手の野球に対する情熱や両親への感謝の気持ちに感動し、インタビューの成功に満足している様子が見ええた。

< 作文の一部分より >

この体験をとおして、選手たちは一軍に上がることをめざして練習と試合に真剣に取り組んでいることを知り、すごいなあと思いました。僕の将来の夢は、ホークス関係の仕事につくことです。そのために、高校進学をしたいので、まず勉強を頑張ろうと思いました。

活動の実際 「パソコンで発表作品の制作」

インタビュー内容をローマ字入力でパソコンの画面にまとめ（写真2）、発表するための準備をおこなった。中村選手に会えた喜びを伝えたいという意欲から、文字の大きさや背景の色、表示の効果にこだわって、23枚の画面で丁寧に作った。また、インタビューの成功体験から自信をつけ、発表への意欲の高まりから「ホークスの歴史」「ホークス応援歌」「ホークスクイズ」を制作した。



【写真2 インタビュー内容のまとめ】

活動の実際 「実証授業 機器の活用の工夫」

今までの体験活動が表現にいきるかどうか、実証授業をおこなった。主眼を「機器を活用しながら発表の仕方を工夫し、適切な声でのびのびと発表練習すること」とし、インタビューを通して学んだことや感動を再構成して、仲間はどう伝えるかを考えさせることをねらいとした。まず、作文の流れが6つの段落で書かれていることをカードを使って説明した。次に、映像のカードを提示し、作文のどの場面でパソコンやビデオの映像を使えば効果的であるかを考えさせ、生徒自ら決定させることにした。また、理由を求めたところ「作文を読んだ後に紹介した方がわかりやすいから。」と答えた。論理的に説明し思いの共有を図ろうとする生徒の姿に驚き、「なるほどね！」と共感した。

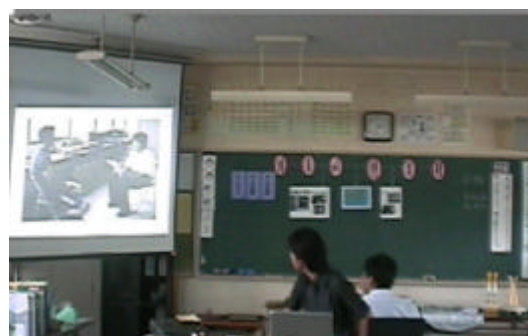
< 生徒Aが考えた発表の流れ >

「練習風景を見ました。」の後、前半ビデオを流す。

「中村選手にインタビューしました。」の後、インタビューの映像を紹介する。

「握手しました。」の後、後半ビデオを流す。

次に、発表の仕方について話し合った。生徒Aのすばらしい体験を振り返らせることで、発表の仕方を考えるように仕組んだ。「人と会話したり、発表したりするときに大切なことはどんなことですか？」という発問に、生徒Aは「大きな声、笑顔、相手の目を見ること。」と答えた。そこで、インタビューの際の映像を再現し、「相手の目を見る、笑顔、はっきりとした言葉」で会話ができていたことをしっかりと誉め、自分自身の取り組みを振り返ることで発表への自信を持たせるようにした。（写真3）



【写真3 インタビュー映像の再現】

実証授業後に練習してみると、機器の操作上の問題に加え、細切れの説明の分かりにくさに気づいたので発表の流れを再度作り直した。映像の挿入を2カ所に減らし、ある程度まとめて文章や映像を紹介することにした。

< 考察 >

憧れの中村選手に会えてインタビューに成功した感動体験から、発表への意欲が高まり、パソコンを使った発表作品の制作では、自ら考え、主体的に取り組むことができた。表現の工夫では、発表する作文や映像をカードで提示したことは、生徒の発想を引き出すのに非常に効果的であった。また、発表の流れは、作文と映像を交互に示した点や、インタビュ

ー体験報告後にホークス関連の内容を紹介し交流を深めようとした点は、生徒Aの相手意識に立った思考力や判断力が働いた結果であると思われる。

広める段階(20~22/22)

体験発表 「3年1組での学習発表会」

約30分間という長い間、再構成した発表の流れ(写真4)通りに、機器を活用しながら自分の力で発表することができた。一方的な報告に終わるのではなく、もっと交流を深めたいという目的から、インタビュー体験報告後に、「ホークスクイズを作りました。解いてみてください。」と言って自らプリントを配った。5分程クイズを解く時間をとった後、「ホークスの歴史」を紹介する中でクイズの答え合わせをした。次に「ホークス応援歌『いざゆけ若鷹軍団』」を画面で紹介しながら、音楽に合わせてみんなで歌い、最後に生徒Aが集めていた「ホークスグッズ」を紹介した。ユニフォームの紹介の場面では「着てみて!」という友達の声に応えて笑顔でユニフォームを着て見せていた。このように、後半のホークス関連の紹介では、緊張も解けて笑顔でのびのびと表現することができた。また、3年1組の生徒達もなごやかな雰囲気最後まで共感的に受け止めてくれた。



【写真4 再構成した発表の流れ】

体験発表 「発表会の反省」

ホークスクイズのプリントに感想を書く欄をもうけていたため、3年1組全員が発表会の感想を書いてくれた。「堂々としていてすごかった」「とてもよくまとめていたのでびっくりした」「楽しかった」「野球に興味を持てるようになった」などから生徒Aも発表

会の成功を実感することができた。

3年1組の生徒の感想

今日、A君の発表を聞いて知らなかったことが分かったし、楽しく聞けました。A君の発表も堂々としていてすごかったです。よく調べてると思ったし、中村選手へのインタビューもちゃんと出来ててすごかったです!! はじめから今日までよく頑張ってたなあと思いました。A君おつかれさまでした。

今日A君の発表を見て、少し野球に興味を持てるようになりました。今までいろいろ大変だったと思うけど、今日の発表は最高でしたよ!!

発表後の生徒Aの感想

発表はよくできた。声はよく出ていたと思います。

練習通りにいったのでよかった。

台本になかったところを、アドリブで言えたのが良かったです。みんなが僕の発表を真剣に聞いてくれたのでとてもうれしかったです。

<考察>

自らの活動を振り返って、発表時の観点である「大きな声ではっきり」「アドリブ」で言えたことは自分の思いを生き生きと表現できる力がついたものであり、本研究にせまる成果であると思う。また、友達に受け入れられ、認めてもらえた喜びが感じられた。

8 成果と課題

(1) 成果

・生徒の関心事に基づいて活動体験を重視し、活動内容を積み上げていく単元計画にしたことで、意欲的に自分の思いを持たせることができた。

・活動体験を生かして相手意識に立った表現の工夫をさせることで、自分の思いを生き生きと相手に伝える力を育てることができた。

(2) 課題

・単元の中で自己表現する場の位置づけと生徒の実態に応じた支援の仕方の工夫。

・表現力の伸びを客観的に見るための具体的な評価のあり方の工夫。